

「ハーメルンの笛吹き男伝説」は太陽活動と関係がある！

渡辺 堯

〈茨城大学理学部地球科学科 〒310 茨城県水戸市文京2-1-1〉

読む度に我々を不思議な幻想にさそうハーメルンの笛吹き男伝説。その成立には、太陽活動の盛衰にともなう地球環境の変動の歴史が、深く関わっているのである！

0. はじめに

店頭に並んでいるドイツの旅行案内書を手にとると、「グリム童話で有名なハーメルンの町はメルヘン街道でも最も重要なポイントで…」などという記述が、必ずと言って良いほど目に入るが、これはおかしい。この伝説は、白雪姫などの童話(メルヘン)が収められている、グリム兄弟の「家庭と子供のための童話」の中には存在せず、同じくグリム兄弟の手になる「ドイツ伝説集」の中の第245話として出て来るのである。童話と伝説とは何が違うのかというと、ドイツ伝説集の序章にあるグリム兄弟の言を借りて言うならば、童話是一种の「詩」であり、必ずしも事実に基づいている訳ではなく(ヘンゼルとグレーテルの話のように、口減らしのための子捨てが実際に行われていたであろう、という推測はつくが)、「伝説」の方は、どこかの橋のもとに夜な夜な幽霊が出た、などという類の話は別として、何らかの歴史的事実を反映している可能性がある。実際にこの伝説の、「1284年のこと、ハーメルンの町に一人の不思議な男が現れた」という、読む度に何か背筋がぞくぞくしてくるような書き出しは、「昔々あるところに」で始まるメルヘンには無い現実性を以て、我々

の胸に迫って来るのである。私は1988年の2～11月にかけて、ハーメルンからは日帰りも可能などところにあるマックスプランク大気科学研究所に、太陽風データの解析のため滞在した折り、この伝説に深い興味を覚えて色々な文献を読んでいるうち、ちょっと面白いことに気付いたので、こういう話では有名なS先生の向こうを張って紹介させていただくこととする。

1. ハーメルンの笛吹き男伝説の成り立ち

誰でも知っているように、この伝説は、次のように要約される。

- ① 1200年代の後半、ハーメルン市は鼠の害に悩まされた。この市はウェーゼル川のほとりにあり、水車による製粉業が主要な産業であったことからして、さぞ深刻な問題であったろう。
- ② そこに突然、色々な色がまだらになった服を着て、手には笛を持った男が現れて、十分な報酬を呉れるなら鼠を退治して見せようと言った。
- ③ 市のお偉方たちが承諾すると、男は笛を吹いて沢山の鼠をおびき寄せ、ウェーゼル川に連れて行って溺れさせてしまった。
- ④ ところが、お偉方たちは報酬を払わず、市から男を追いだしてしまった。

Takashi Watanabe:

⑤ それからしばらくして、1284年6月24日(これはヨハネとパウロの祭日にあたる),その男が再びハーメルンの町に現れた。この時は、獵師の着るような目立たない服を着ていた。そして前と同じように笛を吹いたところ、今度は鼠ではなく、子供や召使の少年や少女、果ては既に年ごろになっていた市長の娘までが男に付いて行き、市の東門を通過して、市の南東の山の中にある洞穴に入ってしまった。連れ去られた子供の数は約130人であった。伝え聞いたところでは、ボヘミアのジーベンベルゲンという山に突然、耳慣れない言葉を話す少年少女の団が現れたそうであった。ハーメルンの人々は、この事件のあった年を基準として、年代を数えることに決め、子供達が行った街路では、楽器を鳴らすことを永久に禁じた。

以上がこの伝説の要約であるが、ここで伝説は前半の鼠にからんだ話と、後半の子供達の失踪との二つの段落に分けられることに注意してほしい。さて、この注目すべき伝説は一体どのような歴史的事実を反映しているのだろうか。それについてはライプニッツを始め古今東西の研究者

が、伝染病説であるとか、誘拐説、戦死説、集団事故死説、少年十字軍説、移民説といった説明を加えているが、真相は深い謎である。

ここで注意すべきことは、グリム兄弟は伝説集を編むに当たって、それまでに出版された伝説についての出版物を参考にしている、という点である。実際に彼らの伝説集には、まるで学術論文のように文献リストまで付いている。この伝説の場合、兄弟の引用した文献は、17世紀から18世紀にかけてドイツ各地で出版された、ドイツ伝説に関する比較的新しい著作である。しかしこの伝説についての記述はもっと以前からあり、それを読むと我々は一つの奇妙な事実に直面するのである。その文献の一つに、20世紀になって発見されたリュネブルク手稿本があるが、事件の起こった約200年後に当たる、1430~1450年に書かれたこの本では、驚くべきことに伝説の前半の重要なモチーフである鼠男については全く記述が無く、いきなり1284年6月24日のヨハネとパウロの祭日に奇妙な服を着た男が現れ、笛を吹いて子供達を連れ去ったという、後半の部分から始まっている。



図1 1592年に描かれた、「最古の」ハーメルンの笛吹き男の絵

この点は他の、グリム兄弟が引用したものよりも古い時代に書かれた文献に共通している。実際、ハーメルン市の絵地図（図1）に初めて鼠男と、それに連れ去られる子供達が登場するのは16世紀の終わり頃（1592）になってからなのである。欧州において、「職業人としての」鼠男が現れるのが何時であるかについてははっきりしないが、どうやら15～16世紀であるらしく、その姿が色々な絵画に現れるのは、17世紀におけるペスト流行期であり、それは当時ペストの流行に何らかの関係があることが薄々気付かれ始めていたであろう鼠などの小動物を、政府が買取ることによって捕獲を奨励したことによるらしい。つまり、鼠男は案外にナウいのであり、笛吹き男の事件が起こった13世紀には、このような職業は存在しなかったのではないか、と思われる。また、モーツァルトの歌劇「魔笛」にあらわれる鳥刺しのパパゲーノが、鳥を集めるために笛を吹くように、「鼠取り人」が笛の音で鼠をおびき寄せることは、実際に行われていたようである（日本でも、鼠を使ってスパイ活動を行う「飯綱者」が存在した）。以上のことがらを総合すると、

ハーメルンの笛吹き男伝説は、13世紀に起源を持つ「笛吹きの人さらい」の話が、16～17世紀にな

って現れた「笛吹きの鼠男」の話とが合体したものである

という結論が得られる。なぜ二つの話が合体するに至ったかという議論は余り「天文学的」とは言えないので省略し、詳しくは阿部謹也氏の著作¹⁾を見られたい。要約すれば、以下に述べるような宗教改革に伴うあつれきから、市当局と教会が、一般市民に恐怖感を植え付けてコントロールするための手段として創作したらしい、ということである。

2. 時代的背景と太陽活動

さて、それではハーメルンの伝説を構成する二つの部分が形成された時代的背景について調べて見よう。まず、実は後世に付け加えられた伝説の前半の部分の成立年代は、恐らく16～17世紀ごろと思われるが、この時代は中世の末期に当たり、宗教改革に続くカソリックとプロテスタントとの争いに代表される新旧両勢力の血みどろの争い（ドイツの荒廃をもたらした、1618～1648年にわたる三十年戦争もこの時代）、英国における清教徒革命（1642）など、フランス革命に続く近世前夜の、何か重苦しい雰囲気漂っていた時代であった。そして欧州全域にわたってペストが猛威を奮

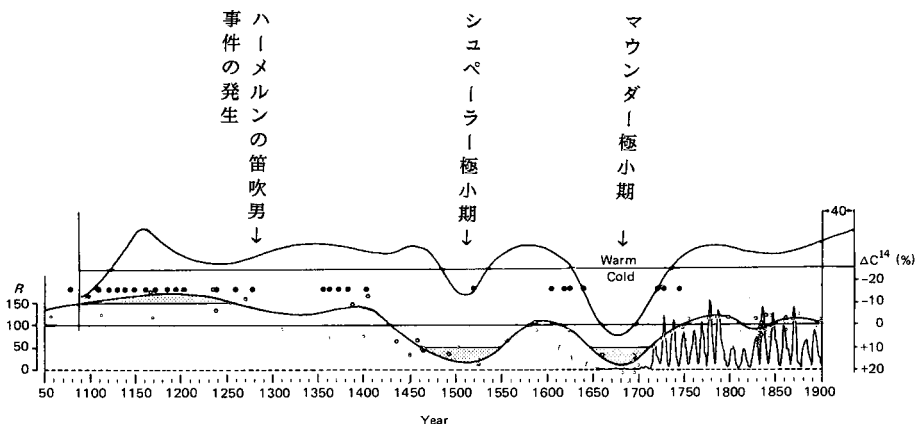


図2 上から、パリとロンドンにおける冬の寒さの指数、 C^{14} によって推定された太陽活動の盛衰、黒点相対数²⁾

い、多くの人々が悲惨な姿で死んで行った。この伝説の記述が現れる年代が下がるにつれて、笛吹き男のイメージが次第に悪魔的な、グロテスクなものに変化して行くのも、当時の世相が反映されているようである。

さて、17世紀という時代は地球環境の面からして、顕著な特徴を持っている。この時代は地球全体としてかなり気温が低く、いわゆる「小氷期」にあたる。図2に、パリとロンドンにおける冬の厳しさの度合い（氷が初めて張ったのは何月何日か、というような記録から判断する）を示す。特に17世紀が寒かったことは有名であり、テムズ川が氷結したり、小麦生産高が急減したり、ペストが大流行したり、といった記録がある。図2の下側のカーブは、宇宙線によって生成される炭素の放射性同位元素である C^{14} が、木の年輪に蓄積されることから推定した太陽活動の変動を示すもので、西暦1500年頃と1680年頃を中心とした、太陽活動の低い時期があり、それぞれ「シュペラー極小期」、「マウンダー極小期」と呼ばれている。ここで面白いのは、世界的に低温であった16世紀前半と17世紀後半とは、太陽活動が低かったこれらの極小期にそれぞれ対応していることである。太陽黒点が減少すると、太陽からの光エネルギーがほんの少し減少することが知られている。この僅かな太陽エネルギーの減少がどうして地球全体に及ぶ顕著な気温の低下として現れるかについては良く分からないが、ハーメルンの笛吹き男伝説の「前半」に当たる鼠男の下りは、恐らく太陽活動の低下による低温化のため、山林で餌を得ることが難しくなった鼠が人里に現れるようになり、穀物をかじられるだけでなく、ペストの流行など、鼠による被害に悩まされたことを反映していると思われる。

一方、笛吹き男と子供達の現れる伝説が生まれた1200年代後半とは、どんな時代であったのだろうか。もう一度図2を見ると、この頃は太陽活動が活発な時期の後半に当たり、気温も全体として

高かったらしい。この温暖な時期はヨーロッパの開拓時代に相当し、ドイツから東欧に向かって盛んに植民が行われた。今でもこの地方には、(米国に欧州に關係のある地名が沢山あるように) 移民の出身地を忍ばせるドイツの地名の面影が、あちこちに残っている。開拓に多くの労力を必要とする植民地においては、子供は貴重な労働力であり、従って「商品価値」も高かった。そのため組織的な誘拐団が出没し、多くの子供を誘拐して売り飛ばすようなことが広く行われていたようである。ハーメルンの場合は、その「歴史的」成功例であった、と言えるかも知れない。何故そんなに巧く事が運んだかといえば、それは事件の起こった6月26日であるヨハネとパウロの祭日が、実はキリスト教に教化される前からあったゲルマンの夏至の祭りであり、ギルドの親方への昇任式や、騎士への叙列、結婚式(「6月の花嫁」は幸せになれる、という話はここから来ている)などの重要な行事が行われた日であることと関係がありそうである¹⁾。ある記録に見られるように、大人達が行事のために市の中心の教会に集まっていて、何となく子供達への監督が手薄になっていた可能性は無いだろうか。伝説に残っている子供達の足取りを辿ると、ドイツから当時盛んに移民が行われたポヘミアあたりに連れて行かれた可能性が高い。しかしその辺の想像は読者にまかせるとして、このような一見荒唐無稽に見える伝説にも、太陽活動の変動に伴う気候の変化によってもたらされる、社会的背景の変遷の歴史が隠されていることを強調したい。

参 考 文 献

- 1) 阿部謹也、「ハーメルンの笛吹き男・伝説とその世界」(ちくま文庫、1988年刊)
- 2) Eddy, J. A. 1976, *Science*, **192**, 1189.